

1

翡翠蚩

イラスト：或真じき

獣魔師達の

インザオーカー

クダリ



試し読み版



インヴォーカー

獣魔師達のノクターン

1

第一章	約束の木の下から異世界へ	005
第二章	トラウマ乗り越え獣魔師へ	030
第三章	初体験とたくさんの恋人たち	056
第四章	ウエンディーヌ先生の世界講座	087
第五章	超絶技巧ブレスレット	116
第六章	サイカ島で待つもの	142
第七章	サイカ島の悲劇	170
第八章	ホホバ山脈	184
第九章	帰還	201
第十章	ハーレムエッチと旅の報奨	228
幕間	オウカの出産	251
第十一章	ウエンディーヌのお料理教室	259
第十二章	八年越しの初体験	276
エピソード		305
設定資料集		311

NOCTURNE OF THE INVOKERS

第一章 約束の木の下から異世界へ

夜道。

「ク気をつけよう 暗い夜道とヤンデレ幼馴染ク

「信じてたのに。初めての夜に他の女とやるなんて。しかも何で祐実果姉ちゃんなの!?!」

おかしい。何だか多大なる勘違いがある。さっきまで生まれて初めて出来た彼女（属性・幼馴染）とアツい初夜を過ごしていたはずだ。というか、もうちよつとで本番、つていうところで〇・〇三mmのアレが無いことに気づいてコンビニに行こうとして。彼女はそんな鈍くさい俺を叱るでもなく優しく送り出してくれてコンビニ行く途中で彼女のお姉さんであるところの祐実果さんに会って。

「一ちゃん可愛い妹とイタしちゃうんならコレあげても良いんだけどな」と、リラックスしたクマがプリントされた近藤さんをちらつかされて。

いや、別に要らなかつたんだけど断ると後が怖いし、

受け取ろうとしたらなぜか袋に入った近藤さんを口に咥えられて。

「口で受け取らなかつたら無いこと無いこと、麻琴にバラす」とかメンドクサイこと言われたので受け取って。

帰ろうとしたところで思いの外時間を食っちゃったから公園をショートカットしようとして、ふと一本の銀杏の前で足が止まった。

約束の木の下のなんてベッタクソな名前をつけられているココは、決して告白してはいけない場所である。曰く「中学から五年間付き合ってた彼女に『俺についてきてほしい』と言ったら『アナタは一人で頑張つて!』と新しい彼氏を紹介された」、曰く「結婚しよう!」「え!! 本気だったの!?!、曰く「妻とは別れてきた」そこまでされると引くわ」などなど。

何でも、ココでフラられた女性が男を刺して首吊つて死んだ、らしい。んな馬鹿な。

じゃあ、今俺の背中から生えている刺身包丁は何だ??

なぜ彼女はギャーギャー喚いてる??



「知らない天井だ」

「災難だったね〜」

「うわ!」

気づけば、知らない少女が目の前にいた。

だがその見た目はさらに見覚えがない。緑柱石の如き髪にスカーレットの瞳、身長は一五〇cmほどでスラリとしているが、出て引つ込むところは引つ込んでいる。それはまあまだ良い。

しかしその鎌は何だ。身長の一・五倍以上もある鎌は…。

「せいかり〜い♪ 察しが良いね。死神のジルちゃんだよ、短い付き合っただけど仲良くしようね」

「…やっぱりか」

「いきなりだけどさあ。あそこで死なれるとマズいん

だよね」

「いや、そんなもん俺も死にたくねーよ」

「まあ死ぬのはしょうがないんだけどさあ」

いや、そこしかたないにしないでお願い。

「あーんなテンプレの心霊スポットで噂通りの死なれ方をするとか本当に心霊スポットになっちゃってさあ。ほんとに霊障が起こってムダに良くないもの引きつけるわ地縛霊は湧きまくるわ、良くないことだらけなんだよね」

「ふむ」

いつの間にかペースに乗せられている俺。

「ま、完全に彼女の思い違いなんだけど、キミはほんとに殺されてるし、彼女はほんとに首吊っちゃってるし」

マジか。

「でね、彼女にはちゃんと他生で罪償って悪霊にならないようにしてもらわないといけないんだけど…」

嫌な予感。

「キミ、手伝ってくれない??」

やっぱり~~~~!!

「悪い話じゃないよ？ キミは別に本来する必要のない生だし今生も割と残ってたイノチ使えるし、いろいろとオマケ^{チート}つけてあげるし、ある程度キミの望む世界構成にしたげるよ？」

むむ？

「たとえは…」

た、たとえは…!!

「ハーレムとかどう？」

「逝^いきます!! 逝かせてください!!」



「じゃあ、条件はここに書いた四つだけで良いのね？」

① 獣や魔物を使役する、召喚獣とか仲魔とかそれっぽい剣と魔法のファンタジー。

② 性的にタブーのないハーレム属性。

③ 内政系は要らない。一冒険者やってみたい。
④ 彼女とは接触がないように。

「はい。あとはテンプレでお願いします」

「りようか~~~~い、あ、でも④は前提条件に抵触するから却下ね」

「え」

「じゃ、いつてらっしや〜い」

「ちよ~~~~~~~~」



長い長い闇の渦巻きの中を通り抜けた先は……
水の中だった。

（もーちよい転移先を融通利かせてくれても良いのに!!）

ジルのニヤリ顔が頭によぎり、必死で水面に上がる。

「ぶは——っ！」

ざっぱーんと這い上がるとその先には……。

ふわふわのボブヘア、少し下がるとたゆゆゆゆゆゆゆんと揺らめく巨大なる二つの山、さらに下がるとボブヘアと同じピンク色の控えめに生えそろうたヘア。

「…」

「…」

双方思考停止。

あーここはやはり天国だ、ファンタジーだ。毛の色もピンクだよママン、てかこれ何てし〇かちゃん？などと現実逃避的思考を張り巡らせていると、先に正気に戻った少女が呪文を唱えた。

「リヴィエル、『スプレッド』」

彼女のブレスレットがチカリと光り、龍の幻像が見えたかと思つた瞬間、風呂の水が巨人の如き拳の形を取り、体ごと吹つ飛ばされた。

薄れゆく意識の中で思つた。

(異世界テンプレな風呂の心配は要らないらしい…)



「気がついた？」

「こっち来て早々、水にどつかれるとは思わなかったよ。キツツイ一発ありがとう」

「わざわざ人がお風呂に入るのを湯船に潜んで待ち構えてるヘンタイさんにはまだまだ緩かった気もするけど」

「いや、違うんだ」

「言い訳ぐらい聞くわよ？」

「アレは死神が悪い」

「リヴィエル、『タイダル・ウェイブ』」「わわわわわちよつと待つた——！！」

「いきなり大津波級の魔法攻撃とか勘弁してよ！」

「そつちこそ嘘つくんならもうちよつとマシな選ばば??」

「はあ…、真面目に話すから突拍子もない話でも信用してくれる？」





「幼馴染の彼女と良い雰囲気になったけど急に買いたい物
思い出して外に出て、彼女のお姉さんにかわかれて
るところを勘違いされて刺し殺された？ 挙げ句に罪
滅ぼしのとばっちり食らって違う世界から転生してき
た？」

「凄いな！ 一回話ただけで理解してくれるなんて
この手の作品ではレアなキャラなんだよ！ 僕のハー
レム第一号はやっぱりキミで決定かな??」

なぜだろう？ 彼女が顛顛こゑまを押さえて首を振ってい
るのは？ あ、ひよつとしてアノ日??

「ごめんなさい、アナタが、憑物よぶつだつたなんて知ら
なかつたから。大方、インプかサキュバス辺りでしょ
う。重くなる前に治療に行きましようね。大丈夫、こ
れでもギルド内の信用は厚いほうなの。アタシがつい
ていけば話は通りやすいはずよ。アナタ、根が悪い人
ではないみたいだし冒険者としてこのまま放つてはお
けないわ」

ん？ 何か話が怪しい方向に…。

「知り合いの、払い手うらひてなら料金も安くして貰えるし、
思いっきりパチコーンとやってもらいましよう！」

待て待て待て待て!! 憑物つて狐憑きのアレか？
しかもインプとかサキュバスとか明らかにヘンタイ扱
いじゃないか！

「待て！ 俺は正常だ!!」

「憑物はみんなそう言うのよ」

イカン！ 悪化した。何かないか？ 何かないか？
こういうときテンプレだと神世遺物イテイルツクドレベルの現代アイ
テムで……。

そのとき、現世から持ってきた二つのアイテムを思
い出した。ターボライターとソーラー電波時計。

「すまないがこの世界での一般的な火の点け方を教え
てくれ」

「火に特化した獣魔を扱える人以外は火打ち石か火精
石を使うのが普通…つてそんなことも忘れてるの？」

イケル！ 文明国の力（？）見せてやる！

カチリという音とともに蒼白い炎を上げたターボラ

イターを見て彼女が驚きの表情を見せる。

「何これ!? 何の魔力も感じられないのに何でこんな高温の炎が詠唱もなしに作れるの? 魔力が感じられないってことはただの燃料? なのになつきお風呂で濡れたはずのこれがどうして簡単に燃えるの??」

思った通り。実はこれ、転移先でたちまち火元がないと困るということで水に濡れてもOKなターボライターを持ち込んでいたのだ。あまり大きな物を持っていても嵩張るだけだし、水は何とかなりそうな気がしたので手のひらサイズのこれだけ持ってきたのだが意外なところで役に立った。

「異文明から来たってこと、少しは信用して貰えた??」

「確かにこれはそこいらにあるもんじゃないわ。でも、迷宮遺物レベルなら発掘されなくもない」

「じゃあ、これは?」

俺は意気揚々と腕時計を見せた。

「これは…今度は弱いながらも光精石のエネルギーを感じるわ。ここに書かれている文字は数字を簡略化し

た物のようだけど…一体何??」

「これは時計だよ。光精石っていうのは何となく想像がつくけど、これは光のエネルギーを吸収して、光のエネルギーのみで動く永遠に狂わない時計だ。そしてある程度の防水機能がついているからお風呂で濡れても作動し続けてくれたんだ」

今度こそ彼女は目を丸くした。高々少量の光精石でここまでの魔法具は作れない。遺物がどうかというレベルではない。この世界で知られている技術体系とは成り立ちが違うことが想像できた。

「まだ全部信じた訳ではないけれど…」

「取り敢えず着の身着のままのその格好ではどうしようもないから近くの村まで一緒に行つてあげる。その旅中に詳しい話を聞くことにしましょう」

「良かった!! 助かるよ。実際この世界のこととか何も分からないから俺が正気で有ろうと無かろうとこのままではどうしようもなかったんだ。今更だけど俺の名前は高梨一、この世界では名前が先? 名字が先?」

「名前が先よ。アタシの名前はウエンディーヌ・トライザスタ、召喚師よ。ついでにアタシの召喚獣も紹介するわね。リヴィエル！ 出てきて!!」

「ふい〜、やつと話に混ざれるわ。退屈すぎて滑稽で無理矢理飛び出してやるうかと思っちゃった」

ウエンディーヌの呼びかけに応じて瑠璃色の肌を持つ龍が姿を現す。召喚された瞬間は三〇mにも及ぶうかという身の丈であったが、すると縮んだかと思うと一七〇cm程のスレンダー美女に変化した。ハジメには詳しいことは分からないが、その体から迸るオーラのような物は紛れもなく先ほどの龍と同じ威圧感を放っており、また瞳と髪の色は龍のときと同じ瑠璃色であった。

「初めまして、私はリヴィエル。人間たちには水龍王、なんて呼ばれてるわ。さつきはちよこつと殴っちゃってごめんなさいね。基本的に契約を結んだ相手の言うことには従わなきゃならないの」

「ちよこつと…ね。まああれは事故だから良いとするにして、リヴィエルさんは俺のことをヘンタイとか憑

物とかそういう扱いしないの？」

「リヴィエルで良いわよ。てか、そんな扱いする訳ないじゃない。私を誰だと思ってるの。これでもこの世の構成に直接関わる召喚獣よ。この世界にあれだけ大きな変化起こしてくれてれば嫌でも分かるわよ」

「え？ じゃあ、リヴィエルさん、じゃなくてリヴィエルは最初から俺の存在について大体のことが分かってたの？」

「そういうこと」

ニヤリ、と底意地の悪い顔を見せてリヴィエルが笑う。

「じゃ、じゃあ助けてくれても良かったんじゃ？」

「だって…」

「だって？」

「ウエンディーヌもハジメも超おかしかったんだもん！」





出合いは風呂とともに……。というロマンチズムに欠ける初対面だったために警戒心は解かれていないが、リヴィエルが「ハジメはこの世界の外の存在」ということをキチンと説明してくれたおかげで一先ずは頭の痛い子扱いから逃れることができた。

「それで俺はさつきも言った通り、この世界にポイツと投げ入れられたに近いから、この世界の常識が殆どないんだ。基本的なことを幾つか聞かせて貰えるかな？」

「アタシも学者つて訳じゃないからそれほど詳しい訳じゃないけど、一般的なことで良いなら良いわよ」

「まず、暦について。一年は何日？ 一日は何時間？ 一時間は何分？ 一分は何秒？ そもそもこういう単位ある？」

「あるわよ。三百六十五日、二十四時間、六十分、六十秒」

地球と同じらしい。重力がほぼ同じに感じるし、星の大きさとか自転周期とかは何となく同じ気がしていたのだが。

「お金の単位は？」

「銅貨一枚が一ミュール、銀貨一枚が一〇〇ミュール、金貨一枚が一万ミュール、光貨一枚が一〇〇万ミュール。百倍ずつ上がっていく感じね」

「普通に一食食べるのとか、宿に泊まるのとか、四人で住むぐらいの家の価値とかは？」

「場所にもよるけど、一食は外食すると五〇〇ミュールから一〇〇〇ミュール、宿は五〇〇〇〜一万ミュール、家は一億〜三億ミュールつてどこかしら？」

家高えな。それ以外は大体、日本と同じぐらいか？
「家高いね」

「決まったところに住むのなら借家が安くて良いわよ。一年契約すると二〇万〜三〇万ミュールぐらいかしら？」

「光貨でも一〇〇万ミュールだと、それより上の買い物の場合はどうするの？ 家のとときとか大変じゃない？」

「獣魔師イシツギヤカならプレスレットにチャージしてあるミュールで決済するのが一般的ね。一般人もチャージ水晶使

うことが多いわ。これは高額な場合もそうだし、そうでなくても現金を大量に持ち歩かなくて良いのは便利ね。ブレスレットチャージが使えないど田舎にでも行かない限り使えるから、これがあれば金貨二〜三枚持つてれば大抵何とかなるわ」

そう言って彼女は鈍い光を放つブレスレットを見せた。左腕に巻きつけているそれは一見銀色だが、よく見ると虹色の輝きを放ち、表面には神聖文字ヒエログリフと思しき複雑な紋様が刻まれている。

「あー、それ『スブレッド』のときにチカってしてたよね。召喚の魔法具かと思ったらそんな機能もあるんだ」

「…よくあの一瞬でそこまで見てたわね。これはアタシたち獣魔師にとって命と同じぐらい大事な存在なのよ。他にも色んな機能があるんだから」



「次はこの世界の地形とか国とかについて教えてくれ。」

大きな国とか、どこの国とどこの国が仲が良いとか悪いとか、ぶっちゃけ戦争してるとか」

「この世界は北のアルケランス大陸と南のプロイセミア大陸に分かれているわ。それぞれが赤道を挟んで二等辺三角形のような形で東西に延びて、星の裏側で繋がっている。北西には乾燥して冷涼で作物に乏しいけど鉱物資源が豊富な聖アルケミア帝国」

アタシたちが今居る、サイドン平野もここね、と彼女は呟く。

「その東が逆に作物は豊富で鉱物が乏しいランスロット王国、南西には四大国で最大の領土を持つけど穏やかな国民性のプロット公国、南東にあるライスセミア幻神国は国は小さいけど兵の練度が高く、好戦的ね。その他にも島や運河や大陸貿易の要所に小国があつてそれぞれの勢力も、四大国には敵わないがらまれば無視できないレベルね」

「で、大きな戦争はないのか？」

「ないわね」

「へえ？」

タダシミセシメニコロシテヤル。ハウンドウルフノ
エサニデモナレバイイ」

「すまなかつた。俺はこの世界に来たばかりでルール
がまだ分からない！ 村に戻ったらちゃんと知らせる
から、ここは見逃してくれないか？」

「：タシカニオマエハコノセカイノコウセイブンシ
デハナイヨウダナ。コンカイダケミノガシテヤツ
モイイ。ダガツレノオンナハダメダ」

「頼む！ 俺は君たちのような美しい存在と敵対した
くない!!」

(：何を話しているの?)

傍で見ているウエンディーヌには一体彼がどんな交
渉をしているのかはつきりと聞こえない。同じ獣魔師
なので念波で雰囲気は伝わるのだが、ハジメの資質は
恐らく操獣師テイマか契約師コントラクター、召喚師の彼女では詳しいこと
は分からないのだ。

…。

…。

数秒、数十秒、時間の感覚がないまま時が流れ、無

限にも思える程の後、突然ハジメがブラックホーンホ
ースに向かって歩きだした。

「!!」

ウエンディーヌには止められなかった。あまりに真
剣で、そして慈愛に満ちたハジメの瞳を見ってしまった
が故ゆえに。

ハジメが近づくと、何とブラックホーンホースが跪
き、そしてハジメは彼らの角に静かに口づけた。血気
に逸っていたブラックホーンホースの瞳が見る間に落
ち着きを取り戻していく。

「ウエンディーヌ」

振り返った彼の次の言葉は規格外などという範疇で
はなかった。

「彼らと友達になれたよ」



「アナタ、ほんとに一体何者なの??」

村には近づいてきていたのだが、思わぬ遭遇により

時間を取ってしまったために彼女らは今、野営をしている。

テントの中では早々とハジメが眠りについていて、何と夜番はブラックホーンホースが買って出てくれた。

先ほどのブラックホーンホースとのやり取りを見る限り、ハジメが操獣師か契約師のいずれかの資質があることは間違いない。しかし、彼女が知るどちらのやり方にも属さない。いや、どちらにも似ている、と言うべきか。

プレスレットの能力に頼らずそれを成し遂げてしまったことも有り得ない。彼女が知るプレスレットとは、魔法生物としての資質を持たない人間という種族が、魔法金属を媒介して魔法生物たちと交渉をするアイテム、のほずなのだ。

(有り得ない…)

今日何度目か分からない台詞を独りごちた。



(リヴェイエルに聞いてみるかな…)

「リヴェイエル、ちよつと話し相手になつてちょうだい」

「はいはい、まいりますたー♪ そろそろ来るころだと思つてたわよ、るるるん♪」

「何よ、そのるるるん♪って。わざわざ口に出さなくても良いでしょうに。…それといつも言つてるけどアタシ貴女のマスターになつたつもりはないわよ」
「そおんな連れないこと言いつこなしよ？ まいますたー♪」

「貴女がその言い方をするときつて大抵確[？]なこと考えてないのよね…」

「まあまあ。それで？ まいますたーのお悩みごとは、あの規格外の異世界人さんのことで良いのかしら？」

「そうよ。それなのよ。彼が獣魔師としていずれかの資質を持つてゐることはブラックホーンホースと交渉して従えたことから明らかなはずなんですけど、獣を従えるやり方が操獣師とも契約師とも違う気がするのよ。操獣師だとしたらあまりにもブラックホーンホースは彼に比べて強すぎるし、契約師だとしたら今の彼に契

約で差し出す交換条件が想像がつかない。しかも、そもそも魔力源とも言えるブレスレットなしにCの上級に位置する魔物を従えて、あまつさえ興奮状態にあったブラックホーンホースと、友達になる。もう無茶苦茶すぎて獣魔師として自信なくしそうよ」

「そうねえ。一つ可能性は想像がつくんだけど…百聞は一見に如かず。貴女が彼の資質、確かめてみたら?」「確かめるって言っても村のギルドに行つて資質試験を受けようと思つたらどう頑張つてもあと二三日はかかるわよ? その間に今日みたいなのがまたあつたら…」

にや〜り、とチエシヤ猫の如き笑みを浮かべてリヴィエルが呟く。

「あるじゃない、資質を確認するつておきの方法が」

「——!! ダメ! ゼツタイ!! ムリムリムリムリムリムリムリムリ!!!」

「え〜、どおしてえ〜??」

「貴女分かつて言つてんでしょ! ア、アタシ、そう、いうこと、したことないのよ!!」

「な〜りにカマトトぶつてんのよ。何も貞操明け渡せつて言つてんじゃないのよ? ただ心を通わせて口づけを…」

「わーわーわーわーわー——!!」

急いでリヴィエルの口をふさいだウエンディーヌであつたが、興奮しすぎていたらしい。

「どうかしたの?」

騒ぎを聞きつけたハジメを起こしてしまつた。



「へえ…俺にはその獣魔師? の資質があるらしいと。それで獣魔師にもいろいろあるけど俺がどれの資質があるか調べておいたほうが良い、つてこと??」

「そうなの。見たところアナタは操獣師か契約師の可能性が高いんじゃないかと思うんだけど、いずれにせよブレスレットなしで獣魔を使役している状態というのはあまり好ましくないわ。ブレスレットは獣魔との架け橋の役目をしてくれるんだけど、それなしで使役

していると気づいたときにはハジメの魔力はすつからかん。中の上ランクの魔物であるブラックホーンホースの「憑物」とか、ここいらみたいな田舎の「払い手」では手に負えないから良くて魔人、悪ければアナタごと成仏ね」

傍らで聞いていたウエンディヌは、うぐ、と鳴咽を漏らした。リヴィエルが話した内容に一片の嘘も無い。否、嘘は無い。

が！ ちらちらこつちを覗き見しながらチェンヤスマイルをこぼす辺り、アレをさせる気満々である。

「それで……どんな方法で調べて貰えるの？ 危険性とかはない??」

「危険性はないわよ。ただ単に心を込めて相手のことを思って口づけを交わせれば良いだけなんだから」

「……はい？」



女三人集まれば姦しい、とはよく言ったものだがア

レは違うな。二人でも十分だ。

「そもそもそれならリヴィエルがやれば良いじゃない！ 貴女のほうが上位精神生命体なんだし、より詳しいことが分かるでしょう？」

「嫌よ」

「なっ!!」

「私たちが「契約」以外で軽々しく人間とそういうことをしないのは知ってるでしょう？ 大丈夫よ。貴女を通して必要なことは調べてあげるから」

「むぐぐぐぐ」

冒険者としては一人前で、ソロプレイもそつなくこなせるようになってきているウエンディヌであるがこの辺りは海千山千のリヴィエルに敵うべくもない。

「良いのかしらあ〜？ Bランクとしてようやくギルドの信頼を集め始めたウエンディヌ・トライザスタ様がみすみす目の前でブラックホーンホースの「憑物」が出来上がるのを指咥えて見てたなんてことになって

も」
「あががががが」

「良いのよ？ そんなことになったら後味悪そうだし、人の好きそうな彼をまいますたー♪ 自ら葬り去ってサイドン平野の土に返してやれば良いんだから」

「ふんがあ~~~~！！！！！！！！！！」

「あ、キレた」

「良いわよ！ 分かったわよ!! やってやるわよ!!!」



「ごめんね、出会いからこっちは何か俺のせいではないの巻き込んでやって…」

「良いわよ。ソロプレイしてれば予測不能の自体に陥ることはよくあるって言うし」

「それより…」

「？」

「ア、アタシこういう性格だから意外に思われるんだけど…」

「…うん？」

「初めてなの」

「!!」

「だ・か・ら！ シタことないの!!」

狭いテントの中で向かい合って改めてウェンディヌを見た。ピンクのふわふわのبوبヘアにやや丸みを帯びた顔立ち。口調が強気なので感じさせなかったが、よく見れば美人と言うよりも柔らかな可愛らしさを感じさせる。鮮やかなサファイヤブルーの瞳は水を抜く彼女の穏やかさと激しさを象徴しているかのようだった。

そして唇……。ぼつてりと膨らみ、うつすらグロスを引いた、そこだけ顔のパーツの中で一際大人びた印象を与える。

(これからあそこに口づけを…)

ごくり、と思わず唾を飲み込んでウェンディヌの肩を抱いたハジメは少しずつ自分語りを始めた。

「少しは話したと思うけど…」

「？」

「十七歳の誕生日、俺は元の世界で幼馴染と初めての夜を迎えるはずだったんだ」

「何それウザい。この状況でそういう話する？ 普通」

「うん、場違いなのは分かっている。でもウエンディーヌには全部聞いてほしいんだ」

「彼女の部屋で小さなパーティをして、お酒を飲んで、静かにキスをして。いよいよこれからってときに、ある物が無いことに気づいた。こっちではどうか分からないけど向こうの世界では十七歳というのはまだ学校に通っていて親の下にいる年齢だった。結婚も簡単にはできないしやりたいこともあった。だから子供が出るのを防ぐアイテムが必要だったんだけど、緊張していた俺はそれを持ってきていなかった」

ハジメは言葉が続ける。

「そして近所に買いに行くところで彼女の姉―彼女がライバル心を燃やす人―に出会った。そこでいろいろな勘違いをさせるような行動を取ったんだけど、まさか彼女が見てるなんて思ってもいなかったから気にも留めず彼女の待つ部屋に帰ろうとして……」

知らず、腹に手をやり、言葉を紡いだ。

「帰宅途中、思いっきり勘違いした彼女に刺された。

俺の初めての思い出はそんな最悪なところで止まってるんだ」

気づけば自然と涙が溢れていた。

「死んだのが辛いんじゃない。こうして別の世界に來れたしウエンディーヌやリヴィエルさんに会えたこの事實はもう決して変えたくない。ただ、俺は前世の最後で完全に自信を喪失している。長年連れ添った幼馴染に信用して貰えなかったというところでね……。俺に悪いところがなかったとはもちろん言わない。迂闊に過ぎたんだと思う。こっちの世界でもう一度自分という人生をやり直したい。『好きだ』なんてまだ言えないけど、俺を信用してくれないか？」



涙を流す彼と向き合い、目を閉じた。アタシから行っても良かった、それぐらいには信用していたけど。「彼を受け入れる」という姿勢を見せてあげたかった。零れるような、掠れるような声で彼はアリガトウを

言い、唇が近づき、静かに触れた。



ウエンディーヌが目覚ますと…。

「：知らない天井ね」

「ウエンディーヌ??」

ハジメもこの妙な場所に来ているようだ。

「ハジメ?」

お互いを見つめ合い…。

「キャッ!」「わわっ!」

アタシたちはなぜか服を着てなかった。

「ごめん! そっち向いてて! 今軽く羽織る物、出すから!」

「…ここは?」

「何でか知らんけど俺の部屋なんだよね。しかも元の世界の」

軽く部屋着を羽織った彼がユニカのような部屋着らしき物(ワイシャツ)を投げってくる。

勝手にベッドに潜っていたアタシは布団の中でもぞもぞとそれを羽織る。彼の物らしいそれは小柄なアタシには短いロープのような長さになったが、彼がアタシを見る目が何だがいやらしい。まあ不愉快じゃないから良しにする。しかしこれでは胸がまったく収まらない…。

「どうやら二人はハジメの^{イリエンション}幻体化の儀式に捕らわれたようね」

「わわっ!」

「リヴィエル! どうしてここに??」

「資質試験を行うときにウエンディーヌと接続して監視していたからね。行き先を辿ったらここに着いたという訳」

「そ、それよりも幻体化?? ハジメは操獣師か契約師だったんじゃない?」

「何? そんなことにも気づいてなかったの?」

「ち、違う! ああ!! ハジメそんな悲しい顔しないで!! キスはとっても良かったけど…ってそうじゃない」

「ち、違う! ああ!! ハジメそんな悲しい顔しないで!! キスはとっても良かったけど…ってそうじゃない」

くつて！ ハジメの資質は…??」

「はあ…、落ちていて自分の記憶を辿れば分かりそう
なもんだけど。ハジメは四つの資質を全部持つてるわ」

「…ほえ？」



「アナタ、一体何者なの??」

もう何度目か分らない台詞だ。

この世界には獣魔師と呼ばれる獣や魔物を扱う人間
たちが居る。それらは、明確に、四種類に分けられる。



① 召喚師

モイカセビースト

神世界に存在する召喚獣の力を借りる。召喚獣には
基本的な物理攻撃や魔法攻撃は通らない。唯一他の獣
魔からの攻撃のみにダメージを受ける。一人一体し
か契約できない。召喚師自身よりも遥かに強力な召喚

獣と契約できるが、召喚獣は強力すぎるが故に物質界

では相応に制限された力しか発揮できない。それを僅
かな時間フルレンジで発揮させるのが召喚術である。

② 幻体師

イリュージョニスト

精神世界から己の想像・創造した幻体を出現させ戦

わせる。幻体には基本的な物理攻撃や魔法攻撃は通ら
ず、個体の能力は召喚獣にも及ぶ。唯一他の獣魔から
の攻撃のみにダメージを受ける。一人一体しか保有
できない代わりに常時出現させ連れ歩くことも可能。
但し、幻体師自身とダメージを共有する。

③ 操獣師

テイマー

物質界で実体化して存在している獣魔と心を通わせ
て操獣することができる。使役した操獣魔は通常の物
理攻撃や魔法攻撃でダメージを受ける。何体でも使役
可能である代わりに基本的に自分より力の劣る獣魔し
か使役することができない。元々実体化している獣魔
を操獣するので、一度使役関係を結べば特別にエネル

ギーを与える必要はないが、あまりに非人道的な使役は見限られることもある。また、プレスレットに収納することもできないというデメリットもある。

④ 契約師コントラクター

物質界で実体化している獣魔と心を通わせて契約関係を結ぶ。使役した契約獣コンフレイトは通常の物理攻撃や魔法攻撃でダメージを受ける。何体でも契約可能であり自分より力で勝る獣魔を従えることも可能だが、優秀な獣魔は押し並なべて契約時の要求も高度になりがちであるため、バランス感覚が難しい。またプレスレットに収納可能でもあるが、プレスレット内での維持には大量の魔精石を必要とする。



「ここまでが良い？」

「つまりどれも一長一短って訳だね」

「そういうこと、扱う人間が強力になればそれに従う

獣魔も練度が上がるし、獣魔師として共に成長していける。操獣師は強力な獣魔を従えられないから弱い、なんてことはなく要は使い手の問題なの」

どうでも良いが彼女のコスチュームが気になってしかたがない。

裸ワイシャツロリ巨乳…。あ、赤い鼻水が。

「…真面目に聞いている??」

「あ、ハイ！ もちろんであります!!」

「…まあ良いわ。それでハジメがブラックホーンホースを手懐けたときだけど、恐らく『操獣師と契約師の能力が同時発動している』」

「へえ」

「へえ、つて…。とにかく最後まで説明を続けるわよ。特別な契約関係を結ばず、獣魔と心を通わせるというのは操獣師の力。しかしそれを行うにはブラックホーンホースは強すぎるのよ。少なくとも今のハジメにとっては。契約師の能力である『自分より上位の獣魔との契約交渉』がなければ使役することなんてできつこないはずなの。アナタ、彼らとどんな約束をした

の??」

「えっと、繁殖期に近づかない、それを周囲の人間にもちゃんと教える。生まれた仔馬は決して意識的に人の手にかけてさせない、そこで友達になつて一緒に旅がしたい」

「有り得ないぐらいに軽すぎるわね。本来ならそのメス―つまりはアタシだけ―を生け贄に置いていけ、ぐらいい言いかねない」

うん、めっちゃ言つてました。

「これがどれだけ異常なことか分かる？ ハジメには四つの資質が同居してるだけではなく、それを同時に使用できる。つまり、上位の獣魔を操獣師と同じようにお手軽に扱え、召喚獣を―しかも恐らく複数―ブレスレットに収納し、幻体を身に纏う、そんな破天荒な戦闘が可能なのよ??」

チートキター――!! 等と調子こいてたら、まあそんなことしたら魔力不足でミイラになるだろうけど、と念を押された。

◆ ◆ ◆
「話、終わったあゝ??」

勝手にポテチとビールを開けてパリポリやつてたり
ヴィエルが声をかけてくる。

「そろそろ夜も更けたし、幻体化の儀式、終わらせ
て外に出たほうが良いわよ」

「あ、そうだ。ここからどうやって出るの?」

「何か知らんけど勝手に暴走して儀式が始まつちゃつ
たからねえ。終わるまで出れないと思うよ。ここ精神
世界だからハジメが本気で、出たい、って願えば体あ
つちにある訳だし戻れるはずだけど、何だかこつちに
未練があるでしょ?」

お得意のチェシャスマイルで見透かしたように笑つ
た後、「じゃ、後でね」と勝手に一人帰っていく。

ポテチとビール返せ!!

そう。俺はこつちに未練がある。儀式、というこ
とは幻体を手に入れるチャンスなのだ。それをみすみ
す逃してなるものか! 鉄は熱いうちに打て!!



「幻体師っていうのは四つの中で一番、最初の難易度が高いとされているの」

理由は言われなくてもよく分かる。他の三つはやり方さえ分かれば身の丈に合った獣魔を使役すれば良いのだから。

だが、幻体師が操るものは『もう一人の自分』。そして『何を望むのか?』が明確である必要がある。

答えは自分の中にしかない。

「ある人は大事な人を守る堅いゴーレム、ある人にとつてそれは何よりも早く駆ける馬、或いは…」

「すつつぶ」

「え?」

「ウエンディーヌの気持ちはとつても嬉しい。でも、先入観をつけたくないんだ。ここが儀式の場で、ここに二人で来たつてことが大事なんだと思う。後のことは何となく分かる。だからこそリヴィエルさんも敢え

て何も言わずに帰っていったんだと思う」

「ウエンディーヌ」

「は、はい!」

「背中、預けて良いかな?」

「え?」

「ここは元の俺の部屋。そしてここで俺は新たな力を得て新しい世界へ旅立つ。その力を得るまでの間、何が起るのか分からない」

だから。

背中を守っていてほしい。

前代未聞の資質を持っていて、運命に翻弄されながらも前を向いて立っている。震える彼の腰に腕を回し、背中に額を押しつけた。



目を瞑ると見知った自室が瞬き始めた。

光が語りかけてくる。

「アナタは誰?」「おぬしは誰じゃ?」「オマエハ誰ダ?」

さまざまな声が響く。でも俺には何となく分かってきた。

俺は俺。そして君たちはみんな僕。

悩んで、傲慢で、優しく、みんな俺。みんな僕。

「アナタにとつて力とは?」

大切な人を悲しませないこと。

「それはとつても傲慢だよ?」

…傲慢は駄目なのかな?

「悩んでいるの?」

いや、悩んではない。もう一度誰かを悲しませる

なら傲慢で良い。

「欲張りなんだね」

そう。僕は欲張り。でも欲張りだから何かを求めら

れる。

語りかけるように明滅していた世界が暗転を始めた。

(祐実果姉さんなんかに取りられたくない!)

…ヤメロ。

(麻琴も見えてないし多少の役得ぐらい…)

ヤメロ!

(チッ、初めてのときぐらい大目に見て生なまでヤラしてくれりゃ良いのに)

「ヤメロ!!!」

ふわり。

「??」

(大丈夫だよ。背中では預かっているから)

「——!!」

そうか。

これは自分のトラウマ。

超えるべき壁にしてほする力。

…もう怖くない。

「頑張ったね」

「キミに相応しい力はこれだ。使いこなすかどうかは

声こゑが、光が、集まってくる。やがて光は人形を取り

始める。

その背中には萌葱色の翼。気づけば瞳も髪の毛も同じ色だ。

一七〇cm弱程度の身長で、体に生えた同色の体毛が局部を隠している。

(…ってまた女性!?)

「こんにちは、マスター。私に名前をください」

「キミのできることを教えてくれ」

「時間と空間をある程度操ることができます」

「分かった。君の名前は…」



「クロノスって男の人の名前じゃないの?」

「良いんだよ。細かいこと言いつこなし! 彼女も喜んでたでしょ?」

「…ねえ」

「ん?」

「ハジメ、頑張ったね。アタシ背中で泣いちゃったよ」

「背中、預けて良かったんだろ?」

「——!! 聞こえてたの??」

「うん、おかげで乗り越えられた」

「えへへ。…ねえねえ」

「ん、今度は何?」

「ここでトラウマ一つ乗り越えちゃわない?」

ハジメの目的であった幻体獲得は済んだのになぜ精神世界から出られないのか? ウエニデイズ 彼女にもこの世界でやりたいことがあったのだ。

第三章 初体験とたくさんの恋人たち

「つ、疲れた…。宿に戻って少しゆっくりしよう」

「そうね。ほんとなら買い物したりギルドの説明したりいろいろあるけど、取り敢えずは宿を取ってお昼ご飯にしましょう」

「迷いなく歩いていくウェンディヌ。宿の場所とか分かるのかな？」

「なあ、宿屋の目印みたいなとかあるのか？ 随分自信ありげに歩いていくけど」

「ベッドのマークが出るのが素泊まりの宿屋、ジョッキのマークが酒場、両方がつてるのがBAR付きの宿屋。優良店にはさらにギルドのマークがついてるからその辺に入っとけば間違いないわよ。ギルド公認店なら割引も利くし」

「なるほど。てことはあれか、あれか、あの辺なら良いつてことだな。」

「あと、宿屋を利用するのは冒険者が多いからギルド

の近くに自然とそういうお店も集まってくるの。逆にギルドから少し外れたところにあるのは値段も少し安めね」

「歩くのが面倒だから、つてことかな。」

「この宿屋で良い？ 今日疲れてるかもだけどブレスレットが出来るまではアイスホルストに居ることになるし、遠すぎず買い物もしやすい場所が良いと思うの」

「もちろん、こつちでの宿の善し悪しなど分からないのでお任せにする。まあ前世でも大したホテルに泊まったことないけど。」



「「えらっしゃい！ 二名様ご案内！！ 本日はお泊まりで？ お食事で？」」

「ザ・女将さん！」

「ザ・板長さん！」

「そんな夫婦が出迎えてくれた。」

「取り敢えず三泊と今日の昼食をお願いしたいわ。お幾らかしら？」

「料理はセットメニューで良いのかい？」

「ええ。久々の人里での食事だから沢山よろしくね」

「えーつと、部屋はシングルが五八〇〇、ツインが八八〇〇、ダブルが七八〇〇だけどれにするね？」

「そうか。俺たちの関係がただのパーティか男女の仲か分からないもんな。普通はこういうところならツインかダブルだろうけど。」

「ダブルを三泊、夕食以降の食事は後で決めるわ。お昼は幾ら？」

「お泊まりなら八〇〇ミュールド。三泊と二人分の食事で二万五〇〇〇のとこだけど、ギルド割で二万ミュールドで良い」

ウエンディーヌはさっさと決済して席へと向かった。

「テーブル席へごあんなくらい!! ランチセット二つ、三十秒で準備しな！」

「「「ガッテン! よろこんで!!!!!!」」」

いろいろギリギリだが良いのだろうか??

「…ほんとに三十秒で出てきた」

「何驚いてるの? とにかく乾杯しましょ!」

え? ウエンディーヌつてイケるクチ??

「苦いのはダメだけどお酒自体は好きよ」

「そっか。じゃあ俺はビール:じゃなくてこのピジョールつてので」

「アタシはメルシー・ラムを炭酸割りで!」

ぶっちゃけ俺は酒なら何でも飲めるので適当で良いのだ。が、運ばれてきたそれはまさしくビールだった。

「何に乾杯する?」

「出会いと、これからの旅路と、二日遅れの誕生日に」

「「かんば—————い!!」」



「はぐはぐ！ むぐ！ もぐもぐむぐむぐ！ んぐつんぐつんぐつ！ ぷつは~~~~!!」

「ちよつと…がつつきすぎよ??」

「こつち来てから旅用の携帯食しか分けてもらつてなかつたからさあ。いやしかし、これは旨い!」

メイン料理はホロホロブヒーという豚のような魔物のグリルだった。ハジメは順番とか何とか全部すつ飛ばしていきなり肉にかじりついた。

「このホロホロブヒーって肉、脂身が少ないのに噛むと、ぎゅむぎゅむ肉汁が出てくる! 使われてるスパイスも何だか分からないけどかなりの時間擦り込まれてるみたいだし、辺境のレストランでお昼からこんな手の込んだ料理食べられるなんて!」

次に横に置かれたスープを一啜り。

「こつちのスープはブヒーの骨で取つた出汁だしかな? トロミがかつてて後を引くなあ。コラーゲンたっぷりだ!」

さらに小鉢に置かれていた野菜を一かじり。「虹色ハーブって不思議な味だね。すつきりした香り

なのに甘味があつて肉料理が美味しく食べられるよ」
「…凄い食べっぷりねえ。それに、よくそれだけこつちの料理分かるわね? 料理、結構好き?」

「うん! 元々食べるのも作るのも大好きなんだ。後でレシピ聞きたいぐらいだよ」

最初はビジョールで流し込んでいたハジメであつたが、ウエンディイヌのメルシー・ラムを試してみたところ、これがかなり旨かつたので今はそれをロックでグイグイやつている。

メルシー・ラムはかなりのアルコール度数を誇るが、ハーブを漬けて込んで喉越しを爽やかにしてあるため、呑んだ後まさに、メルシーッな気分になれる。

結局定食を三セットおかわりしてしまつた。最後にお冷やを一气飲みしてお腹を撫でた。

「ぶひゅー、食つた飲んだあ」

「ほんとに物凄い量食べたわね。お腹大丈夫?」

「腹八分目が健康に良いんだよ。これで丁度」

アナタの十分目はお財布に良くないわ、と思わずぱやくウエンディイヌ。

「そう言えばさつっきの話だけドウェンディーヌって料理しないの?」

ぴしっ。

(アレ? 今なんか空間に衝撃が走ったような…)

「:ハジメは料理ができない女の子は嫌い?」

アレ? 地雷ON??

「い、いや、料理なんてどうにかして食べていければ良いと思うよ、うん」

「アタシは好きか嫌いか聞いているの。回答になってないわよ?」

「あ、いや:どちらかと言えばできないよりはできるほうが」

「リヴィエル、『ウォーターガン』」

ぷつしやあああとウェンディーヌの指先から水が勢いよく噴き出し、ハジメは椅子ごと吹っ飛ばされた。



彼女は先に部屋に戻り考え込んでいた。哀れハジメ

は全身ずぶ濡れになったので一人で宿の風呂に入っている。

(ふん! 料理ができないぐらいなんだってのよ!!

アタシだってその気になればホロホロブヒーの香味スパイス焼きぐらい:)

「できないと思うわよ、まいますたー!」

「だからいつつもいきなり出てくるなつーの!」

「まいますたーがあんな高度料理に挑んだら、ポロポロブヒャーのこうもヤヴァイツ!! 焼きが、いいところね」

「むぐ:」

「まあ、私がおのうち、簡単で見栄えがして作り手の努力の伝わる料理を一つぐらい教えたげるからそれまでは大人しくしてなさい」

「そんなのあるの!」

「あるわよ? 男は胃袋と○袋を掴まなきゃ! ウェンディーヌの場合残りは胃袋だけだからね」

風呂場からゴトゴトと足音がした。ハジメがわしわしと髪の毛を乾かしている。

「お風呂頂いてきたよ、ってリヴィエル来てたの？」

「私は貴方たちを監視するぐらいしか今はやることないからね」

リヴィエルは、ほれほれ、さっさと謝らんかい、という視線を投げかける。

「ごめん、ウエンディーヌ、この料理があまりに美味しくってちよつとヒートアップしちゃってた」

「…ん」

「誰にでも苦手なことってあると思うんだ。俺は絵が苦手できあ」

「へえ…？」

「人に何か説明するとき、分かりにくいときは絵に描いたりするじゃない？俺、アレがまったく駄目。頭の中にあるものが実際に手を動かすと何でか知らないけどまったく別物になっちゃう」

「そう！アタシの料理もそれなのよ!!」

「絵と料理だと全然違うことだけど、自分の苦手なことを無遠慮に話されるのが嫌だっていうのは分かるから…。ごめん」

「うん」

元々リヴィエルの説得で大方気分は戻っていた。あまり意地を張るのも格好悪いだけだろう。

「うん！ありがと。アタシも一つぐらい料理覚えていつかハジメに作っただげる」

「そりゃ良いや！俺もこっちの食材とか料理とか覚えてたいし機会があれば一緒に覚えようよ」



「ウエンディーヌはお風呂行かないの？」

「うん、行ってきても良いんだけど…」

「？」

「まずは部屋のシャワーで汗流そうかな。あんまり歩き回らずにノンビリしたいし」

「そうか。部屋にもシャワーはあったのか。」



「ちよ、ちよっと！ 何でついてくるのよ!!」

ダブルルームの小さなシャワー。そこには当然男女の仕切りなどなく…。

「さっきのお詫びに背中流させて」

「…背中だけよ？ 午後からは買い物に行かなきゃなんだからね?」

「了解了解。俺も村を見て回りたいし」

「…絶対よ?」

「OK」

先つちよだけ。先つちよだけだよ。



しやわしやわしやわしやわ。

こつちの世界にちゃんとしたシャワーがあるとは思わなかった。さっきの大浴場では浴槽から桶で汲んで洗ってたのだ。

「はあ…冒険者稼業は嫌いじゃないけど頻繁にお風呂に入れないのが辛いところね」

まず彼女の髪を流し、ブラシで丁寧に梳く。ふわふわとウエイブがかかっているのでそうしないと洗ったときに絡まるのだそうだ。

「髪を洗うのはこれだよね?」

こちらの世界ではシャンプーも石鹸も区別がない。ココの滴^{しずく}というプロット公国に生える樹木の樹脂から作られた物らしい。ほんのりバニラのような香りがする。

地球の物に比べて最初はこつてりと固まっているがお湯でほぐしているとぶくぶく泡が立ってくる。

「ん、はうう、やっぱり頭つて気持ち良い。つていうかハジメ、洗うの上手ね?」

「そう? こんなもんじゃない? 俺は髪短いから適当なほうだと思っよ? 普段は誰に洗ってもらってるの?」

「リヴィエル」

Oh, I see.

泡を洗い流し梳^{くしげす}ると埃でくすんでいた髪の毛がキラキラしてきた。本来の色はパールピンクに近いようだ。

「じゃ、背中流すね。でもその前に…」

「？」

「首、凝ってない？」

「分かる!？」

「うん、頭洗うときにちよつと触った感じ、凄く凝ってた」

ウエンディー又はグルグルと首を回し、困ったような、それでいて少し嬉しそうな表情を見せた。

「そうなのよ。アタシ、やつぱり胸が重たくつて…」
嵌った。肩凝り持ちの人は「凝ってるね」と言われるのをみんな待っているのだ。

これで堂々と体を揉み揉みできる。ぐふふふふ。

「はあああん…ふう…あん、そう、そこ、ああそれ凄く、痛たっ！もうちよつとゆつくり…あふううう…」
完全に蕩け始めた。俺自身が肩凝り持ちなのでポイントはよく分かる。

「ほんと上手ね。お金取れるわよ」

タオルでココの滴を泡立てて背中をこするとウエンディー又は少し残念な表情を見せた。

「背中流したらまた揉んだげるよ」

「うん♪」



「こつちの首はどう？」

「？」

タオルで腕をこすりながら手首をもみもみ…。

「あん！そこももつとお」

「じゃあこつちは？」

次は足首。

「そつちも！そつちも！」

じゃあ…。

「ここの首は…？」

「え？あ、こら!! 調子乗りすぎ!! きやうつ! ふうん…あ…やつぱり気持ち良いっ…!!」

乳首もお気に召したようだ。

「胸が大きくて凝るんならこも揉んだら良いよ」
鎖骨の下辺り、おっぱいを支えているところをもみ

もみもみもみ…。

「はひゅっ！ ダメそれ気持ち良すぎ！」

俺は密かにココの滴を自らの体で泡立てていた。そのまま後ろから抱きつき、ぬめりと滑らせた。

「ああっ！ ハジメの体がこすれ、てえ…体全部で感じるよお…」

はあはあと息をつく彼女と向かい合う。今度は、ゆっくりと巨丘に胸板をこすりつける。

時々力を加減して固くしこった乳首をかすめさせ、両手は体に挟んでなお余る巨乳へ。

たぶん たぶん たゆたゆたゆ。

押せば無限に形を変え、力を抜けばしっとりとし返してくる。蕩けるような柔らかさとしっとりとした手触りを思う存分楽しむ。

同時に両の十指は横乳から脇にかけて、こしょこしょとくすぐるように駆け上がらせた。

「——!! きゅうらんっ!!」

一際高い声を上げると体中に力を込めて伸び上がり、全身で弛緩した。

「逝った？」

「そこ、弱いって言ってたでしよう??」

泣きそうな顔で見上げてくる。

そろりと陰毛を掻き分けると、泡とともにとろりとした愛液が垂れ流れてきた。

「ちよ、ちよっと待って！」

しかし既に待てと言われて待てる段階ではない。

「ちゃんとベッド行こ?? ほんとの初めてがこんなとこだなんてやだよう」



俺たちは体を拭き、ローブを纏い寝室に戻った。

「待ちわびたわよ？」

「マスター、私ももう我慢できません」

とつても聞き分けの良い使役獣魔たちが寝室で待っていた。



「リコール」
「召喚解除」

「嫌よ」

「嫌です」

「ナヌッ!!」

前言撤回。やつぱり聞き分け悪かった。

というか何で俺たちの使役獣魔はこうも規格外な行動を取る??

「そもそも何でリヴィエルが出てくるのよ!!」

「だって…私は今ウエンディーヌとしか契約してないのよ? 殆ど精神は繋がりがりっぱなしみたいなんだし。あんなに見せつけられたらたまらないわ」

透明な隣の部屋で同じ顔した双子がやってるみたいなんもよ、とよく分からない例えを言う。

「それに折角ハジメには召喚師の資質があるんだし、ここで私と契約しとけばこの先他の召喚獣が見つかるまで戦力的にもその他諸々でも便利でしょ?」

理屈は分かる。確かによく分かるが、その他諸々

が強烈に不安である。

リヴィエルは諦めてクロノスの説得を試みた。

「どうして指示もしていないのに勝手な行動を取る??」

「これは元々マスターがお望みになられたことなんですよ?」

「んなっ!! そんな馬鹿な!!」

「私を形作られたとき、心の奥深くで、女性に対するトラウマが強く感じられました。それを克服し、もう二度と女性を傷付けない、その望みが私には刻み込まれていますので」

要するにクロノスは慈愛に満ちた女性で俺の女性不信というか刺されたトラウマをなくしてくれるってか??

何だかんだで結局押し切られた。ダブルベッドに四人。狭い…。

「何だか妙なことになったけど…」

「もう良いわ。但し! 一番はアタシだから。ちゃんと初めてをやりたい」

もちろんそのつもりだ。

「二人ともそれでOK？」

「まあ、さすがにそこまで無粋でもないわよ？」

「私もマスターの望みを自然に実現しますので」



横になると狭いので座って向かい合う。

「ウエンディーン」

「ん？」

「愛してるよ」

今更だけど敢えて口に出して伝えたい。言わなくても伝わってる自信はあるけど言えば言う程気持ちちは膨らむ。

「ん♪」

まずはハグ。ローブはまだ脱がず、肩に手を回す。強く、優しく。言葉では伝わらない想いを込めて。濡れて燦めく髪を手で梳いてやると、ほわ、と表情が緩んだ。

「それヤバいって何回も言ってるでしょ？」

「でも好きでしょ？」

「…うん」

ローブを脱がせ合い、後ろに放り投げる。

「ちゅ…んう…れる…あむ…ちゅぶ………」

唇をついばみ、重ね、舌を絡める。

「ちゅ…ちゅる…ちゅちゅちゅるる…！」

絡まり、吸い上げ、狭い口腔内で小さな愛撫が激しく加速する。

ぷひゅう、とお互い息をつき、自然と愛撫は体の下

部へ移行。

うなじをちゅつと吸い上げ、舌を這わせる。

「んう…ちよつとキスマークつけないでよ??」

「見えるところにはつけないよ。…つてかそんなこと言うなんてまだまだ余裕だね？」

弱点への砲火開始決定。

右手でそろそろと豊満なおっぱいを全体的に揉み上げる。舌で左の乳首を転がし、そして左手は…。

「きゃふつ！ あうつ！ くふううつ！ いや、ちよ

つと待って！ そこヤバいって！ あきゅうん！

こつちもおっぱい
こつちもびりびりするうう！ ダメ、ダメダメ、逝き
そう！！

やはり脇への愛撫は弱いようだ。声が一際高くなる。

「一回逝っちゃおっつか♪」

「ま、待って！！」

？ ？ ？

ほんとに押し止められた。

「アタシにもハジメを気持ち良くさせて？」



ウエンディーヌの嬌態を見てベニスは既に痛い程に
振り返っていた。

「凄い：お腹につきそうね」

あつちからもこつちからもじいじいといつと眺められ
る。

「あ、あの、ウエンディーヌ、そろそろ何かの刺激が

欲しい」

「うん。触って良い？」

目で頷くと両手でそつと包み込んでくれた。片手だ
と力加減が分からなくて不安なのだろう。

竿に手をやり、しゆる、しゆる、と怖々扱きだす。

何だかどつてももどかしい。

「もうちよつと強くても…」

「そう？ まだ加減が分からないの。痛かったら言っ

てね？」

少し締め付けが強くなり、しゆるりしゆるりと擦り

あげてくる。

「んっく！ 凄い。気持ち良い！」

自分の右手で扱いてるときのようなただ絞り出す作
業ではなく、愛情を込めて快感を引き出そうとする行
為。

「えへへ。何か嬉しいね。ハジメがアタシをやたら責

め立てる気持ちが何か分かる気がする」

先走り液が溢れ出て彼女の手まで垂れ始める。亀頭

から滲むそれを舐めとるようにウエンディーヌはベニ

スの先に口づけた。

「うくっ！」

「ゴメン!! 痛かった?」

「いや、びつくりしたのと気持ち良すぎたのと…」

彼女の表情がまたほころぶ。カリの部分まで口に含み、先端をペろペろと舐め回した。

「もつと全体を…」

舌を尖らせて、てろーと裏筋に舌を這わせ、竿にくるくると舌を巻きつけ、くちゆくちゆと唾液を口に含ませたかと思ったとき、一気に根本まで咥え込んだ。

じゅぶ じゅぶ じゅるる ぐちゆ じゅぶじゅぶ じゅぶじゅぶ

こちらの表情を窺いながらウエンディーヌのフェラは激しさを増す。カリと裏筋で俺が反応したのが分かったのか、動きながらも時折そこに舌が巻きついてくる。

「ウエンディーヌ、ヤバい、そんなに激しくされたらっ!」

イッてしまう、そう言おうとしたそのとき、さらに口腔奉仕がスピードを上げる…!

「——!! くうっ!」

びゅるっ びゅんっ びゅんっ びゅるるるっ!

「——!! ごぼっげぼっ!」

コントロールが利かず、思い切りウエンディーヌの口に思いの丈を出してしまった。

びくびくと跳ね回るペニスは大量の精液を放出し、彼女は突然のことに咽せるしかできなかった。

「ごめん! タオルを取ってくる!!」

しかし。

「んぐ、ごく…。うえ、マズう…」

「無理せず吐き出してくれて良かったのに」

「ハジメがアタシで気持ち良くなってくれたシルシだもん。ちゃんと受け止めたかったの。殆ど零れ出ちゃったけど…」

想像や映像の中では何度も体験した台詞。しかし生身にかかる感触は。

「ちょ!! ちよっと?? ハジメ、痛いわよ??」

愛おしすぎて思いつき抱きしめていた。

ちゅ。

「んげっ！ マズッ！」

「そりやまだ口の中にハジメのが残ってるんだから…。
当然でしょ」



「ちゅぶ…ちゅる…ちゅる…」

改めてキス（ウエンディーヌが最小レンジの『ウオ
ーターガン』で二人の口をゆすいでくれた）。

お風呂から口腔奉仕に至るまででかなり興奮してい
たのだろう。彼女のそこは既にたつぷりと濡れそぼっ
ていた。

「脚、開いて？」

「うう、やだ恥ずかしい…」

そう言いつつも自らの手で膝を抱えM字開脚の姿勢
を取る。入り口をぬるぬると全体的に愛撫し、指で開
いていくと皮から顔を覗かせた彼女のクリトリスが目
に入った。

固く勃起し、びくびくと震えている。

こりこりこりこり。

「——!!」

びくつ、と体を強張らせたのでキスと視線で「大丈
夫だよ？」と語りかけ、優しく愛撫を続ける。溢れ出
た愛液はとろとろしていたものがねっとりへと粘稠度
を増し、興奮が強くなっているのが分かる。

中指をそつと差し入れると、ざらざらとした壁の
先に未開の証の障壁が感じられた。これ以上指を入れ
るのはまだ不可能だ。

ならば…。

べろり。

「きゃあ！ そんなとこダメ!!」

「どうして？ ウエンディーヌはあんなにいつぱいし
てくれたじゃん？」

「アタシは良くてもハジメはダメなの!!」

「でも、気持ち良かったんだよね？ ウエンディーヌ、
気持ち良いとき足が跳ねるもんね」

「——!! そんなの知らない!! 気持ち良かったけど
ダメ!!」

「却下」

ペロペロ…ちゅうう…ぢゅるる…。

「あふ！ つくうん！ いや、ほんとにダメ！ おかしくなる!! 初めてのなのに！ こんなヘン!! ねえ、逝きそう。逝きそうなの」

「俺にしながら感じてくれてたの？」

「そうっ！ そうなの。ハジメのオチンチンが喜んでるの見てもうたまらなかつたの!!」

「ねえ、お願い、もう入れて？ これ以上されたらおかしくなりそう。アタシの初めて貰って!?!」

さっきのお返しとばかりにクリと膣の愛撫で逝かせようと思っていたが、こんなに可愛いことを言われたら息子がもう黙っていない。

実際は二人とも初体験のだが、半分はそうでない。やり方は既に分かっている。

「いくよ？」

「来て。今度こそは優しくね」

ぬる、つと入り口は抵抗なく入り、濡れも十分なのでミチミチと押し進める。

「あぐううううんっ！ 入ってくる！ 膣内でハジメを感じる！」

こっつ、と触れたそこをペニスの先端でくりくりと弄る。

「あ、うふう、やだ、怖い怖い怖い!!」

一旦動きを止めガクガクと暴れる彼女を精一杯抱きしめる。

「ウエンディーヌ、獣魔契約時のキスを」

「ほえ？」

ちゅ。

「——!!」

キスとともに俺の思いが、愛しさが彼女に流れ込む。タイミング過たず一気に奥まで突き込んだ!

めりめりみしり! と割り広げたとき、契約のキスを通して彼女の激痛が俺にも伝わってきた。

それとともに俺の快感が彼女に流れ込む。

…と、ウエンディーヌのほうから唇を離れた。

「？」

「ダメ」

「え?? 何が??」

「ハジメの気持ちは嬉しいけど、初めての喜びも痛みもアタシだけのもの。ハジメにも上げられない。これは女に生まれた幸せなんだから。好きな人に貰った痛みも快感も全部アタシだけのものだから」

「ウエンディーヌ…」

「ありがとね。もう怖くないから動いて? ゆっくりね??」

にちゆ

まずはそつと一往復。

「:んっ! そう、それぐらいが良い。続けて?」

にちゆ:にちゆ:ぬちや:。

全身への愛撫や口づけを続けながらゆっくり膣内を味わう。膣壁をじっくりと責めながらも緩急をつけてみる。

「ああ、ハジメを感じる:嬉しい、ハジメのオチンチンがどんどんおつきくなってくる!! ねえ、気持ち良い? 気持ち良いの??」

「ああ。ウエンディーヌの舌が何百枚も絡みついている

みたい。ヤバイよ、もう我慢できそうにない…」

「良いよ。いっぱい動いて? 何か奥がジンジンするの:。ハジメのオチンチンでいっぱいにしてほしいの!」

「いくよ? 痛かったら我慢しないでね」

「にちやにちやにちやにちやにちやぬちやぬちやぬちや:。」

「あつ! あつう! はあつ! あうう、イイ! イイ! 激しい! 激しいよ! いっぱい感じる。もつと欲しい! 気持ち良いようっ!」

「ウエンディーヌ! ウエンディーヌ!」

「ハジメ! 来て! 出して!! ちょうだい!! いっぱいちょうだい!! ハジメのでアタシの膣内いっぱいにしてえ!!」

普段はどちらかと言えば慎重で深い、恥ずかしがり屋のウエンディーヌの口から飛び出した言葉に、いよいよハジメのヴォルテージも最高潮へと達してゆく。

「いくよ? もう出るよ!」

「ちょうだい! 精液ちょうだいっ! ハジメの熱



だ。

錠剤にしてはかなりデカいな。

「それをアソコに入れると一時間ぐらいで溶けて吸収されて使用後十日間、妊娠を防いでくれるっていう…」

アソコに入れるアフターピルみたいなもんか。

「ただちよつと困った副作用があつて…」

ん？ 何だか楽しいげな予感…。

「使用後三日間以内に色情魔^{ニシツキマニア}症状が出ることもあるの

…」

ベッン^ベベッレ^レ!!

体内魔力回路の混乱が原因らしくてどうのこうの。

恐らくホルモンバランスが崩れるつてことなんだろうな。

「絶対、ではないんだね？」

「うん…。三割ぐらいの確率つて話。起こりやすい人

もいればまったく平気な人もいるし、前は大丈夫だったのに次は駄目とかその逆とかも」

「症状はどれくらいで治まるの？」

「半日ぐらい」

そりゃ一人だったら大変だな。大丈夫。今日からは俺がついてるぜ!! まあ今まで使ったことはないはずだけど。



「お話終わった？」

「マスター、私たち完全に空気でしたね」

あ、すっかり忘れてた。

「可愛い可愛いまいますたー♪ の大事な大事な初体験だからこっちは我慢してましたわよ? あんなに想いが通じ合つてればそりゃもう幸せだったでしょうとも。でも、精神的に半分ぐらい繋がつてるわよつて話忘れてない?? 途中でウォーターガンだけ都合よく使つたりして」

「マスターの想いは汲み取つていたつもりです。マスターの願いを実現するのが我々幻体の存在意義ですの。不安な世界に墮とされて一番最初に出会つた妹系巨乳美少女に^{イリシツクシツク}刷り込みされてしまう気持ちは重々承知

第五章 超絶技巧ブレスレット

その日は前日までの疲れが出たせいか、こつちに來て以來、初めて寝坊してしまった。時計を確認：しようとして収納スペースの中だったことに気づき、クロノスに聞いてみた。

(今何時??)

(十一時前ぐらいですね。ウエンディーヌさんとリヴィエルさんより、『お昼過ぎるまでに起きれば良いから寝させてあげなさい』って伝言です)

(そっか…、彼女たちは?)

(昨日の服屋さんにマスターの衣装を取りに行かれましたよ)

そう言えば昨日はドミナンさんとこ行った後、あんまりにも頭に血が上っていて受け取りに行くのを忘れていた。

正直体がまた重い。元々特別体力があるほうでもなかったし、いろいろありすぎて少々気疲れしているみ

たいだ。

(クロノス、すまないけど女将さんとこ行ってパンと何か軽いサラダみたいな貫つてきて。あと、フレッシュジュースとキンキンに冷えたお水を)

(了解しました)

熱いシャワーを頭から浴びると少しすつきりした。…と、ふと気づいた。

ポーション飲んでみれば良いんじゃないやね?

さて。この場合はポーションなのか? エーテルなのか? どっちもそれなりに高級品だ。いや、ハジメの元来の感覚で言えば飛びきり高級品だ。

どれぐらい? と言われれば、保険の利かない抗がん剤ぐらい、と言えば良いだろうか。

「…まあ、悩んでてもしょうがないな」

これからも旅は続く。ローコンデイションでついていくなんて足手まとい以外の何物でもない。両方一緒に飲もうとしたが、よく考えればそれでは効いたとじてどっちが効いたか分からない。

上級ポーションをぐくり。体中の疲れが取れていく

のは物凄くよく分かる。よく見ればアチコチにあった小さな擦り傷とかが見る影もなく消えている。

でも、気持ちはまだすっきりしない。

続けて上級エーテルをぐびり。胃腸が跳ねるように熱くなり、全身に血が巡り始める。

「こ、こいつは!」

何というか、将に向精神薬、しかもアップパー系だ。

気疲れなんてあつと言う間に吹き飛んでしまった。

(クロノス! クロノス!)

(はい!? 何でしょうか??)

(ランチセット二つも追加で持ってきてくれ!!)

食欲はすべての源である。ちゃんと食べばこの世に

怖いもんなし!!



(リヴェル、今どこ?)

(あ、起きた? 疲れが溜まりまくってみたいだけか

ら心配したのよ? こっちはもう戻るとこだけど…)

(上級ポーションと上級エーテル飲んで、飯食ったらすつかり元気だよ)

(良い選択ね。アナタの疲れの原因はブレスレット使わずに獣魔とアレコレやりすぎて魔力不足になってたからだからね。普通ならあんな無茶すれば干物か憑物になってるとこだけど、ハジメの魔力が破格だったのが幸いしたわね)

なるほど。それならやはり上級エーテル飲んどきや良かったのかな?

(まあ、とにかく元気になったし迎えに行くよ。ギルド庁前で待ち合わせしよう)

(りようかい)

ウェンディー又たちと合流して、受付のお姉さんに身分証明しようとしたら「話はギルドマスターから伺っております」とさつさと専用室へ通された。

「お待たせしました。ドミナンから昨日連絡受けました。『あんな面白い逸材にこんな辺境で会えるとは長生きはするもんだ』なんて珍しくはしゃいでましたよ?」

「前置きは良いから、さつさと説明して貰えませんか？」

「すみません、まあそう慌てず……。こちらがハジメさんの残りの三本です」

金よりさらに高貴な黄金色のオリハルコン。

銀よりさらに高貴な白銀色のミスリル。

銅よりさらに高貴な赤銅色のヒヒイロカネ。

三本には今まで見た物よりもさらに細かい神聖文字がびっしりと彫り込まれており、よく見れば大きさも少しずつ違う。

黙ってナイフを差し出されたので、こちらは何も言わずにすべてに血を垂らした。

づにゆるりゆるりるるるる。

想像はしていたが三本とも生命を吹き込まれたかの如く激しくのたうち回って俺に絡みついてくる。腕に巻きつくかと思つて両袖はまくり上げていたのだが、動きが終わつたとき、いずれも腕に巻きついていない。

「——!? どこに行つた??」

「順番に説明しましょう。契約師のプレスレットはハ

ジメさんの右中指に。召喚師のプレスレットは左耳に。幻体師のプレスレットはハジメさんの左中指にありませす」

「!?」

言われた場所を確認すると右中指にヒヒイロカネの指輪、左中指にミスリルの指輪、左耳にオリハルコンのピアス（見えないが……）があつた。

「四本もプレスレットをするとあまりにも目立ちすぎます。機能自体はどれも獣魔師のプレスレットですが、神聖文字を弄つて、あまり目立たない装飾品に形を変えてみました」

「凄い……ただ、俺が聞きたいのはドミナンさんのところの一件なんですが」

「それも統いてご説明致します。まずはヒヒイロカネの指輪に、理想の武器を念じながらキスして見てください」

ぶわん。

「えっ!?」

横で見ていたウエンディーヌまで驚愕の声を上げた。

突如、俺の右手にヒイロカネ製の「刀」が現れたのだ。いつの間にかやら左腰には鞘まである。

「では続いて、ミスリルの指輪に、理想の盾を念じながらキスを。オリハルコンのピアスにはキスできないでしょうから、鎧を念じながらいずれかのプレスレットで『乾杯』してください」

ぶわんぶわん魔法金属が形を変えて、出来上がったのは豪華できらびやかに過ぎる初心者装備であった。



「凄い…」

確かにアクセサリーに見せかけたところか変形するところか武器の材質とかいろいろ凄いんだけど、何が凄いって…。

これがまさしく俺専用の武器防具だと身に着けていて、ひしひしと伝わってくるところ。

「精神世界にあるハジメさんの理想像を具現化するよくな付与魔術をかけてあります。今回はイメーτζルしや

すいようにキスしてもらいましたが、次からはイメーヂしながら撫でるぐらいでできるようになるでしょう。あと、形はある程度自由に変えられます。剣にするも槍にするもハルバードにするも想像次第です。鎧も軽装にするのか重装にするのか、盾も大盾にするのか小盾にするのか籠かご手てにするのか。いろいろ試してみてください」

これってこっちのレベルで考えても物凄い技術なんじゃ…?? 横見たらウエンディーヌが真っ青になっている。

（こんなの支払えって言われても金額がつくレベルじゃないわ。少なくともアタシには払えないわよ??）

人生三回遊べるウエンディーヌの支払い能力超える!!

「す、すいません。こんな立派な物を頂いてお代のほうはどうすれば…?」

「登録手数料三〇〇万×三本で九〇〇万、それにドミンナンへの報酬が三〇〇万、付与魔術料が八〇〇万、合わせて二〇〇〇万ミュールを無利子貸し出し、という

ことでどうでしょう?!

「すみません、幾ら何でも馬鹿にしないで貰えますか? これがそんな安すぎる物でないことぐらい俺にも分かります。一〇億や二〇億で済むものではないはずです」

二〇〇〇万、ちつとも安くないけどな!!

彼女^{エレン}は、すう：つと眼を細めて凄く嬉しそうな表情をした。テストで思わぬ解き方で解答を導いた生徒を見たときのような。

「貴方が、特別な存在だからです」

「：詳しく聞きたいです」

「貴方はこの世界の外から来た。それは私もその後契約獣に確認を取っているので間違いありません。貴方はこの先、この世界の住人では考えもつかない方法や感性でこの世界を見聞するでしょう。私の生きる目的はこの世界の解明です。それを自分の代わりにしてもらうための私からの支援と受け取っていただければいかがでしょうか」

「：分かりました。そうまで言われて断るのは義理に

反しますし、これがこの先俺の旅に役立つことは間違いない。それに、貴女は上手に俺を縛り付けた」

「人聞きが悪いですねえ。折角のプレゼント、お気に召しませんか?」

「貴女こそ。仮にこれが一兆ミュールの価値だったとしましよ。そんな物を何も言わずに受け取らされて、しかもこれは俺の意思で簡単に外せない。でも、二〇〇〇万で良いからゆつくり返してください。そう言われればさつき思つたよりも圧倒的に安いので必死で払おうとする。ところが、俺は駆け出し冒険者で実際にはすぐに払えない。これは貴女と私の一種の契約書みたいなもんでしょ? しかも俺は契約書の内容を先に読ませて貰えなかった」

「：やはりハジメさんの感性は。訳も分からず帰っていつて後から事の重大さに気づく程度であればそのときに種をお教えしようかと思つていたのですが：。正直にお話ししましょう。指輪やピアスに形を変えたこと自体は大した金額ではありません。ドミンが寝ずに鍛造と神聖文字の記述を行つてくれた、その報酬が

三〇〇万、これに嘘はありません。しかし付与魔術は値段がつけられるともつけられないとも言えるのです。アテネ、出てきてください」

彼女の右手首のヒイロカネが鈍く光り、エルフのような、しかし遥かに強大な魔力と美貌を誇る女性が出てきた。髪には金属光沢の羽根飾りをつけているが間違いないアレはヒイロカネだ。そんなただのパレツタみたいに使っちゃって…。

「初めまして。エレンと契約してる古代エルフのアテネよ。リヴィエルは久しぶりね」

知り合いなのか!!

(古い知り合い? 出てくる??)

(嫌! 絶対、嫌! 私の純な性格をねじ曲げたのはその性悪よ!!)

どんだげやねん!!

「何だか、今取り込み中で出てこれないそうです」

「まあ良いわよ。精神世界に寄ったとき、また遊びに行くから」

にまくりとこぼしたチェシヤスマイルはまさしく水

龍王のあの表情そのものだった。

「アテネがこの付与魔術をかけてくれました。これをする技量を持ち、すぐに頼めるエルフがちよつと思いつかなかつたもので…」

なるほど。契約獣に個人的に依頼したのならどんな技術であろうが値段がつかないのも納得できる。

「すごい技術でしたけど…。大変でしたよね? ありがとうございました」

「良いのよ? そもそも付与魔術なんてアタシたち古代エルフが生活のために考え出した便利キットみたいなもんだし」

どうやら彼女もチートらしい。



さて。

「試験には合格でしょうか、エレン先生??」

「百点満点、ですね。いろいろ気を悪くさせてしまつてすみません。貴方たちのこの先が楽しみです。この

先もいっぱいお手伝いさせてください」

「こちらにも納得行きました。基本的にはエレンさんの個人的興味が暴走して、それを自ら上手いこと利用した訳ですね？」

「恥ずかしながら…。そう言わざるを得ません」

あ、そうだ。

「アテネさん、一つお願いして良いですか？」



「本当に渡しちゃって良かったの？ 向こうから持ってきた大事な物だったんじゃないの？」

「良いんだ。確かに愛用品ではあるけど、時間を知るだけならクロノスが教えてくれることが分かったから」

それに向こうから持ってきたターボライターは収納スペースでお休み中だ。

アテネさんへの依頼、それは○・SHOCKへの付与魔術だった。

服屋で付与魔術について店員にそれとなく聞いたのだが、物が壊れないようにするには大きく二つの方法があることが分かった。

- ①物理的、或いは魔法的衝撃に対する耐性を付与する。
- ②時間を固定化する。

どっちが丈夫かといえば単純には後者のほうが丈夫らしい。「世界からの干渉を避けるようにしてその時点の状態を物質を固定化する」というものなので、外的要因ではほぼ半永久的に壊れない。

但し、武器・防具にこれをすると、防具だと身動きが取れなかったり、武器だと「斬る」という行為が世界への干渉となるのでナマクラになってしまったり。主に芸術品などの保存に使われる方法だとか。

一方、前者は簡単に言えば一種の障壁を張ることらしいのだが、これがまた魔術師の力量によってかなりピンキリらしい。だからこそ俺の普段着にかけた術も強化段階によって値段が変わったりするのだろう。

ここで俺の腕時計、できれば②の方法を取りたいのだがアテネさん曰く「そんなことしたら時計自体が止まってしまおう」らしい。まあそりゃそうか。何といつても「時間を固定する」訳だしな。

そこで一旦彼女に預けて、じっくり丁寧に①の付与魔術を施してもらうことにしたのだ。「とびつきり強力ながら光はちゃんと通し、且つ光属性の攻撃で壊れないようにする」などという術式を、未知の構造物に施すのはさすがにすぐには無理」と言われた。



俺は○・SHOCKを、エレンさんに預けてきた。

「アテネさんに付与魔術施してもらう間、エレンさんに預けておきます。その間、これを自由に研究・調査してくださいって結構です。但し、壊したりなくしたりしたら人生かけて弁償していただきます」

正直、かなりキツい条件のはずなのだが、こくこくと物凄い勢いで頷いていた。

「エレンさん、それは次に会うときまで預けておきます」

「私もそれなりに忙しい身ですので、中々会う約束はできかねますよ？」

「大丈夫です。俺もこの世界に頑張って慣れて……そうですね、一年、いや半年以内には必ず見つけ出してませましよう」

「SSランカーの私と鬼ごっこですか。随分な自信ですね。では半年で見つけられなかったらこれは私が頂いちゃおう、っていうのはどうです？」

乗ってきた。正直、絶対言うと思った。彼女は見た目よりも遥かにプライドが高い。

「良いでしょう。では逆に半年以内に捕まえたときは今日の二〇〇〇万をキャラにしてください。国家間の問題などでギルドマスターとしてのエレン・ブライトさんに連絡を取らなきゃいけないときはどうしますか？」

「そんなことで条件が釣り合うんですか？ これは貴方があちらで生きた証でもあるのでしょうか？ ……まあ

貴方の目は本気なので私は構いませんけど…。連絡は、私たちが直接会わなくても貴方の使役獣魔と私の使役獣魔の誰かが念話を通じるようにしておきましょう。私のほうは貴方たちと面識のあるアテネで良いですが、貴方はどうしますか？」

「クロノスが良いですね。彼女なら必ず俺と行動を共にしていますから」

受け取った瞬間、エレンさんは物凄い勢いでギルドマスターの応接室を飛び出して私室に籠もってしまった。しかもドアには「取り込み中！ 乙女の時間を邪魔した者には天罰が下ります」の札。アテネさんが溜息つきながら扉に付与魔術までかけてるし…。多分、固定化のほうだな。



「あんな約束までしちゃって…。何か策でもあるの??」
「あると言えばある。ないとはいえない」

それって…。

「まさか行き当たりばったり、なんて言わないよね??」

「ざっつらいと」

「意味が分からないけど、意味は伝わるわ」

宿に帰ってきたときには日が暮れかけていた。

「明日、ギルドへ行って依頼を受けたいんだ」

「そうね。ハジメとアタシなら受けられる範囲のどんな依頼でも大丈夫だと思うけど…。どんなのが良いの?」

「えっと…、ちよつと思うところがあつて、広い範囲のモンスターや獣魔を相手にするような討伐か、広範囲の検索を行うような採取系が良いんだ。それとブラックホーンホースの繁殖地に…つて、あぁっ！ 忘れてた!!」

「ちよつと!? そろそろ夕飯だけ…」 どうするのよ、と言おうとしたときには既に宿を飛び出していた。

「リヴェイエル、ゴメンだけ」

(嫌よ)

「…まだ何にも言っていないんだけど」

(どうせ『ハジメに話を聞きたいんだけど』とかそんなところでしょ？ 最近、ただの伝書鳩扱いだし。二人は私たちが精神世界から見えてるって言ってるのによつちゆうイチャコラするし。ギルドにはあの性悪がいるし。待つてりゃ良いじゃないの。待つ時間が愛をはぐくむ、つて昔のエラい人は言ったもんよ?)

アンタ、どれだけ新しい人なんだ、などと言ったらさらにややこしいことになるので黙っておいだ。

「しかたない…。待つか」



(マスター、せめて一言お話しされてから出てこないと皆さん心配されてますよ?)

「そっか！ いつけねえな。時間が遅いからギルドが閉まっちゃうんじゃないかと思ったら飛んで出てきちゃったよ」

(伝言、しましょうか?)

「お願いできる?」

(ふふ…、リヴィエルさんは「伝書鳩扱いはゴメンだ！ しょつちゆうイチャコラするな!」つてぶんすかさされてましたよ?)

「そんなとこまで見てたの? …つてか、俺やつぱりちゃんとクロノスを使いこなせてない。こんなときだけど試したい能力があるんだ」

(はい!! やつとマスターのお役に立てそうです)

まずは「実体化」。

左耳のピアスからクロノスが抜け出てくる。あまりにも嬉しそうな顔をして出てくるので思わず抱きついてしまった。

「アン♪ どこにも逃げませんよ? 何時でも呼んでください。アアッ! マスター、さすがにここでは人通りが気になります…」

イカンイカン。小さな村とは言え、通りのど真ん中だった。

気を取り直して…。

「飛び出せ! チビクロ〜ズ!!」

その瞬間、彼女の背中の翼から羽毛がふわふわ浮き

上がったかと思うと、無数の小さなクロノスが飛び出した！

「「「「「「わ〜〜〜い!!!」」」」」」」

「飛んでけ！ チビクロ〜ズ!!」

「「「「「「いってきま〜〜す!!!」」」」」」」

ドップラー効果でフェイドアウトしながら四方八方に飛んでいった。

「さすがマスターですね。私の空間をある程度操るという能力をそのように捉えられましたか：」

「うん、その綺麗な翼と羽を見たとき、ここから小さいクロノスがいっぱい生まれたらきつと可愛いだろうなあ、つて思ったんだ。それで、そこにいっぱいエネルギーが集まっているのも感じたから、多少分散させてもOKかな？ つて」

今回生み出したチビクロ〜ズは、やや大きめ。一体の大きさは燕より一回り大きいぐらいで、それなりの戦闘能力もある。翼の羽毛しか使っていないし、大きめに設定したので数はやや少なめで千五百から二千とあったところか。

ありとあらゆる場所に飛び回り、周囲の検索を行う。その感覚を統合して、ハジメは今、五感のすべてが使用可能なソナーを全方向に打ち出しているかの如く周囲の状況を把握できた。

（はあ：今日も真っ黒になっちまった。かあちゃんにまたドヤされるなあ：）これは、鉱夫だろうか？

（愛する貴方へ、言葉にできない想いを文字に綴ります：）どこかの少女が手紙を書いているようだ。

そして、物の見事に感知できない一角があった。その周囲を探索中だった一体が摘み上げられてピーピー悲鳴を上げている。空間を操作できるとのことだったので光学迷彩を施して飛び回ってたんだけど、さすがに彼女は誤魔化せなかつたらしい。

「おーい、アテネさん。それ、俺の幻体なんだけど、能力の実験中で他意はないから解放してくれない？」

「いきなり鬼ごっこに来たのかと思ったわ」

「そんな姑息なことしないし、そもそも通じるとも思っていないよ」

「それならそもそもいきなり来ないですよ。叩き潰しそ



この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富 1-3-7 ヨドコウビル
TEL.03-3555-3431(販売) / FAX.03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、
ホームページ上に転載することを禁止します。

本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。

また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>